

国立国語研究所学術情報リポジトリ

沖永良部島諸方言の格体系

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-11-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00002480

沖永良部島諸方言の格体系

横山 晶子*¹

1 はじめに

「格」はもともと名詞の屈折に関する文法範疇であり、名詞句と文の主要部の関係を標示する。沖永良部諸方言において、名詞句と主要部の関係は名詞の屈折ではなく、名詞に後続する助詞によって標示される。本稿では「格」をこうした名詞句と主要部の関係性自体を指す用法で用い、格を表す助詞（格助詞）についての記述を行う。

2012年国立国語研究所の与論・沖永良部調査では、沖永良部島四集落（田皆・瀬利覚・出花・国頭）において調査を行った。本稿では、本共同調査で得られたデータを用いて分析を行う。ただし、データが不十分な箇所については筆者の調査地である国頭集落の調査データを引用した。このため、まず2節で国頭方言の格体系について述べたのち、3節で上記4方言の異同を述べる。最後に4節で、沖永良部島諸方言と日本共通語における格体系の比較を行う。

本稿で用いる表記は、報告書の「沖永良部方言データ集の表記について」に従う。また、例文は4段表記とし、1段目に表層形、2段目に深層形、3段目にグロス（文法・語彙情報）、4段目に自由訳を載せる。共同調査によって得られたデータには、「質問X」という形で質問番号を記す。グロスの略号は「6略号」の通りである。

2 国頭方言の格体系

格助詞は、大きく文法格（grammatical case）と意味格（semantic case）に分類することが出来る。文法格は、「主語」「目的語」などの中心的な文法関係を表し、意味格はそれ以外の意味的役割を表す(Blake1994:32)。以下では、まず文法格、次いで意味格について記述を行う。

2.1 文法格

国頭方言において、形態的に標示される文法格は、主格、属格、与格である（表1）。主格、属格にはそれぞれ2形式（=ga/nu）が存在し、接続する名詞の意味的特徴によって形式が選択される（形式の選択については2.1.2）。与格には=niが用いられる。

表1. 国頭方言の文法格

	ラベル	形式	標示する文法関係、意味
主格1	NOM1	=ga	自動詞・他動詞文の主語（①動作・状態の主体、②状態の対象）
主格2	NOM2	=nu	自動詞・他動詞文の主語（①動作・状態の主体、②状態の対象）
属格1	GEN1	=ga	名詞を修飾する名詞（①所属、②性質、③基準、④同格）
属格2	GEN2	=nu	名詞を修飾する名詞（①所属、②性質、③基準、④同格）
与格	DAT	=ni	間接目的語（①動作・授与・受身的動作・基準の相手②被使役者）

*¹ よこやま あきこ：一橋大学大学院博士後期課程

2. 1. 1 文法格の類型論的特徴

国頭方言における格標示は、S（自動詞文の主語）とA（他動詞文の主語）が同一の格標識を取り、P（他動詞文の直接目的語）が異なる格標識を取る、対格型（accusative）の体系である²。主格助詞には=gaと=nuの2形式が存在し、前接する名詞の意味特徴によって選択される（2. 1. 2）。他動詞文の直接目的語は形態的に標示されない。

(1) は述語が1項動詞の自動詞文であり、wa「私」が自動詞文の主語(S)となる。(2) は述語が2項動詞の他動詞文であり、wa「私」が他動詞文の主語（動作主: A）となる。自動詞文、他動詞文ともにwa「私」の主語標示は、格助詞=gaによって担われることが分かる。

- (1) fatte:=ci=wa wa=ga ic-ju-N
 fatte:=ci=wa wa=ga ik-ju-N
 畑=ALL=TOP 1SG=NOM 行く-NPST-IND
 畑へは私が行く。（質問1）

- (2) wa=ga taro: abit-a-N
 wa=ga taro: abi-a-N
 1SG=NOM 太郎 呼ぶ-PST-IND
 私が太郎を呼んだ。（筆者データ）

次に、(3) は述語が1項動詞の自動詞文であり、cju:「人」が自動詞文の主語(S)となる。(4) は述語が2項動詞の他動詞文であり、cju:「人」が他動詞文の主語（動作主: A）となる。自動詞文、他動詞文ともにcju:「人」の主語標示は、格助詞=nuによって担われることが分かる。

- (3) kibiru=niti hju:=mu cju:=nu sizj-u=sa
 kibiru=niti hju:=mu cju:=nu sin-u=sa
 喜美留=LOC2 今日=ADD 人=NOM 死ぬ-PROG=SFP
 喜美留で今日も人が死んでいる。（筆者データ）

- (4) aru cju:=nu uN isi muc-i iz-i faNgit-a-N=gi=jo:
 aru cju:=nu uN isi mut-i ik-i faNgi-a-N=gi=jo:
 ある 人=NOM その 石 持つ-SEQ いく-SEQ 捨てる-PST-IND=EVD=SFP
 ある人がその石を持って行って捨てたんだよ。（筆者データ）

ここで、他動詞文(2)(4)直接目的語（被動作主:P）に目を向けると、(2)はtaro:「太郎」(4)はisi「石」で、共に助詞による格標示がないことが分かる。このため、国頭方言の格標識はS・A=ga/nu、P=∅と表すことが出来る。

² ただし、実際のデータの中には主語の標示が形態的になされないものもある（質問2など）。こうしたデータの説明は今後の課題である。

但し、実際のデータには主格、属格が=ga/nuのどちらの形式も取る場合（質問18、19など）や、主語が主格助詞を取らない場合もある（質問2など）。こうしたデータの説明は今後の課題である。

2. 1. 3 主格 (nominative)

主格助詞 =ga/nuは、自動詞文・他動詞文の主語を標示する。主語は基本的に①動作・状態の主体を表すが、述語が状態性の場合には②状態の対象を表すこともある。

(8) は述語が一項動詞の自動詞文で、=nuで標示される kwa:si「お菓子」は主語であり、状態の主体を表す。(9) は jumajuN「読める」は能力（状態）を表す述語であり、=nuで標示されるhoN「本」は状態の対象を表す。

- (8) nafa=ni=wa mizira-sja=nu kwa:si=nu a-N
 nafa=ni=wa mizira-sja=nu kwa:si=nu a-N
 沖縄=LOC1=TOP 珍しい-ADJ-ADN 菓子=NOM ある-IND
 沖縄には珍しいお菓子がある。（質問 33）

- (9) utuzja=wa eigo=nu hoN=nu jum-a-ju-N
 utuzja=wa eigo=nu hoN=nu jum-ra-ju-N
 いとこ=TOP 英語=GEN 本=NOM 読む-POT-NPST-IND
 いとこは英語の本が読める。（質問 54）

2. 1. 4 属格 (genitive)

属格助詞 =ga/nuは、名詞を修飾する名詞を標示する。修飾名詞は、被修飾名詞の①所属、②性質、③基準、④同格などを表す。(10) は=gaが前のtaro:「太郎」がmuN「もの」を修飾し、taro:「太郎」がmuN「もの」の所有者であることを表す。

(11) は=nuで標示されるeigo「英語」がhoN「本」を修飾し、本の性質（内容）を表す。(12) は=nuで標示されるfaku「箱」がna:「中」を修飾し、被修飾名詞の位置の基準を表す。(13) は=nuで標示されるutu「弟」がsaburo:「三郎」を修飾し、意味的に同内容であることを示す。

- (10) huN hama=wa taro:=ga muN=kaja
 huN hama=wa taro:=ga muN=kaja
 この 鎌=TOP 太郎=GEN もの=Q
 この鎌は太郎のものかな？（質問 5）

- (11) utuzja=wa eigo=nu hoN=nu jum-a-ju-N
 utuzja=wa eigo=nu hoN=nu jum-ra-ju-N
 いとこ=TOP 英語=GEN 本=NOM 読む-POT-NPST-IND
 いとこは英語の本が読める。（質問 54）

- (12) faku=nu na:=ni maNzju:=wa ikuci a-N=kaja
 faku=nu na:=ni maNzju:=wa ikuci a-N=kaja
 箱=GEN 中=LOC1 饅頭=TOP いくつ ある-IND=Q
 箱の中に饅頭はいくつあるかな？（質問 35）

- (13) ziro:=wa utu=nu saburo:=tu ju:zai sj-a-N
 ziro:=wa utu=nu saburo:=tu ju:zai sj-a-N
 次郎=TOP 弟=GEN 三郎=COM 喧嘩 する-PST-IND
 次郎は弟の三郎と喧嘩した。(質問 59)

2. 1. 5 与格 (dative)

与格助詞=ni は他動詞文の間接目的語を標示し、①動作・授与・受身的動作・基準の相手、②使役文における被使役者を表す。

(14) は=niで標示される hanako「花子」が、述語ho:juN「買う」の間接目的語であり、授与の相手を表す。(15) は=niで標示される ama「母」が、述語micjuN「似ている」という状態の基準の相手を表す。(16) は=niで標示される tuzi「妻」が、使役態の述語cukurasjuN「作らせる」の被使役者を表す。

- (14) kazuko=ga muN=tu ji:=nu geta hanako=ni=mu ho:t-i kuri-ra:
 kazuko=ga muN=tu ji:=nu geta hanako=ni=mu ho:-i kuri-ra:
 和子=GEN もの=COM 同じ=GEN 下駄 花子=DAT=ADD 買う-SEQ あげる-INT
 和子の物と同じ下駄を、花子にも買ってあげよう。(質問 72)

- (15) hanako=wa cira=nu ama=ni ju: micj-u-N
 hanako=wa cira=nu ama=ni ju: mic-u-N
 花子=TOP 顔=NOM 母=DAT よく 似る-PROG-IND
 花子は顔が母によく似ている。(質問 74)

- (16) tuzi=ni jumuge: cuku-racj-a-N
 tuzi=ni jumuge: cuku-ras-a-N
 妻=DAT 夕飯 作る-CAUS-PST-IND
 妻に夕飯を作らせた。(質問 57)

2. 2 意味格

意味格には、具格、共格、比較格、場所格、向格、奪格、終局格の7つの格がある(表2)。4で触れる通り、具格=si、場所格2=niti、奪格=karaの用法に共通語との違いがみられる。

表2. 国頭方言の意味格

	ラベル	形式	表す意味
具格	INS	=si	①手段、②起因、③主体、④限界、⑤領域、⑥様態
共格	COM	=tu	①共同動作・相互動作・基準の相手、②並列する名詞
比較格	COMPR	=jooka	比較の対象
場所格1	LOC1	=ni	①存在の場所 ②事態が生じる時間 ③変化の結果
場所格2	LOC2	=niti	動きの場所
向格	ALL	=ci	①移動の着点 ②動作の方向

奪格	ABL	=kara	①移動・時間・範囲・変化前の起点、②空間的な経過域
終局格 1	TER1	=Ntabe	場所・時間範囲の終点
終局格 2	TER2	=Ntani	場所・時間範囲の終点

2. 3. 1 具格 (instrumental)

具格=si は①手段、②起因、③主体、④動作にかかる時間、⑤領域、⑥様態を表す。共通語における「で」の用法とほぼ重なるが「で」が表す「動きの場所」の意味は持たない⁴。「動きの場所」の意味は、国頭方言において場所格 2=nitiが担う (2. 3. 4)。

(17) は=si で標示される hini「船」が「沖縄へ行く」移動の手段を表す。(18) は=si で標示されるbjooki「病気」が「学校を休んだ」原因を表す。(19) は=siで標示されるdu:「自分(祖父)」が「召し上がる」という行為の主体を表す。(20) は=siで標示されるicineN「1年」が「英語が話せる」という動作にかかる時間を表す。(22) は=siで標示されるnihoN「日本」が「一番高い」という評価が成り立つ領域を表す。(22) は=siで標示されるfadasi「裸足」が「走る」という動きの様態を示す。

- (17) nafa=ci ic-ju=si=wa hini=si ik-o=joka hiko:ki=du jukwa-N
 nafa=ci ik-ju=si=wa hini=si ik-ru=joka hiko:ki=du jukwa-N
 沖縄=ALL 行く-NPST=COMP=TOP 船=INS 行く-RU=COMPR 飛行機=FOC 良い-IND
 沖縄へ行くには、船で行くより飛行機が良い。(質問 10)

- (18) bjo:ki=si gakko: jasud-a-N
 bjo:ki=si gakko: jasum-a-N
 病気=INS 学校 休む-PST-IND
 病気で学校を休んだ。(筆者データ)

- (19) zja:zja=wa du:=si o-kaju oisj-a-N=doo
 zja:zja=wa du:=si o-kaju ois-a-N=doo
 祖父=TOP REFL=INS HON-粥 食べる.HON-PST-IND=SFP
 祖父は自分でお粥を召し上がった。(筆者データ)

- (20) icineN=si e:go hanas-a-ju-N=dja:
 icineN=si e:go hanas-ra-ju-N=dja:
 1年=INS 英語 話す-POT-NPST-IND=SFP
 1年で英語が話せるよ。(筆者データ)

- (21) nihoN=si icibaN taka-sa-nu jama=wa huzisaN=dja:
 nihoN=si icibaN taka-sa-nu jama=wa huzisaN=dja:
 日本=INS 一番 高い-ADJ-ADN 山=TOP 富士山=SFP
 日本で一番高い山は富士山だ。(筆者データ)

⁴ 「庭で犬が鳴いている」(日本語記述文法研究会編 2009=2011: 6) など。

- (22) fadasi=si saiuduja sj-a-N
fadasi=si saiuduja sj-a-N
裸足=INS 走ること する-PST-IND
裸足で走った (筆者データ)

2. 3. 2 共格 (comitative)

共格=tu は①共同動作・相互動作・基準の相手、②並列する名詞を表し、共通語の「と」に対応する。(23) は=tuで標示される jiNganu kwaa「男の子(息子)」が、主体ama「母」と「会う」という相互動作を行う相手を表す。

(24) は=tu で標示される inu ?mja:「犬や猫」が、「同じである」という判断の基準を表す。(25) は=tu が前の名詞 kazuko「和子」と、後の名詞 hanako「花子」を並列する機能を持つ。

- (23) ama=wa na:cja to:kjo:=ci jiNga=nu kwa:=tu o:i=ga ic-ju-N=do:
ama=wa na:cja to:kjo:=ci jiNga=nu kwa:=tu o:=ga ik-ju-N=do:
母=TOP 明日 東京=ALL 男=GEN 子=COM 会う=目的 行く-NPST-IND=SFP
母は明日東京へ、男の子供(息子)と会いに行くよ。(質問26)

- (24) kad-i nibu-ju-nu=daki ja-riba inu ?mja:=tu ji:=nu muN
kam-i nibu-ju-nu=daki ja-riba inu ?mja:=tu ji:=nu muN
食べる-SEQ 眠る-NPST-ADN COP-COND1 犬 猫=COM 同じ=GEN もの
食べて眠るだけなら、犬や猫と同じだ。(質問51)

- (25) kazuko=tu hanako=wa agu=dja:
kazuko=tu hanako=wa agu=dja:
和子=COM 花子=TOP 友達=SFP
和子と花子は友達だ。(質問73)

2. 3. 3 比較格 (comparative)

比較格=jo:ka/joka は比較の基準を表し、共通語の「より」に対応する。(26) は=jokaで標示される hju:「今日」が、「風が強い」という程度の比較基準となる対象を表す。

- (26) kiNnju:=wa hju:=joka hazi=nu cju:-sa at-a-N
kiNnju:=wa hju:=joka hazi=nu cju:-sa a-a-N
昨日=TOP 今日=COMPR 風=NOM 強い-ADJ ある-PST-IND
昨日は今日より風が強かった。(質問17)

2. 3. 4 場所格 (locative)

場所格には=ni, nitiの2つの形式がある。=niは①存在の場所、②時、③変化の結果などを表し、=nitiは動きの場所を表す。

2. 3. 4. 1 場所格1 =ni

場所格=niは共通語の「に」の用法とほぼ重なるが「移動の着点」⁵「動作の対象」⁶など、動作に方向性を伴う意味は向格=ciが担う(2. 3. 5)。

(27) は=niで標示される jama「山」は「猪がいる」という存在の場所を表す。(28) は=niで標示される je:nu tuki「祝いの時」は「お婆さんまで踊った」という事態が生じた時間を表す。(29) はniで標示される seNse:「先生」は、主体である utuzja「いところ」の変化の結果を表す。

- (27) anu jama=ni=wa inusisi=nu u-mu=di jussa:
 anu jama=ni=wa inusisi=nu u-mu=di i-ju=sa:
 あの 山=LOC1=TOP 猪=NOM いる-EMPH=QUOT 言う-NPST=SFP
 あの山には猪がいると言うよ。(質問 19)

- (28) je:=nu tuki=ni=wa azi=gadi wudut-a-N
 je:=nu tuki=ni=wa azi=gadi wudu-a-N
 祝い=GEN 時=LOC1=TOP お婆さん=まで 踊る-PST-IND
 祝いの時には、おばあさんまで踊った。(質問 65)

- (29) huzu utuzja=nu cju:gakko:=nu seNse:=ni nat-a-N
 huzu utuzja=nu cju:gakko:=nu seNse:=ni na-a-N
 去年 いところ=NOM 中学校=GEN 先生=LOC1 なる-PST-IND
 去年、いところが中学校の先生になった。(質問 53)

2. 3. 4. 2 場所格2 =niti

場所格=nitiは共通語の「で」の「動きの場所」の用法と重なる。(30) =niti で標示される mici「道」は「先生に会う」という動きが生じた場所を表す。

- (30) mici=niti gakko:=nu seNse:=ni o:t-a-N
 mici=niti gakko:=nu seNse:=ni o:-a-N
 道=LOC2 学校=GEN 先生=DAT 会う-PST-IND
 道で学校の先生に会った。(質問 70)

2. 3. 5 向格 (allative)

向格=ci は①移動の着点②動作の対象を表し、共通語の「に」と「へ」にまたがる用法を持つ。

(31) は=ciで標示される fatte:は「行く」という移動の着点を表す。(32) は=ciで標示される hanakoが「(犬が)吠える」という動作の対象を表す。

- (31) ura fatte:=ci ik-i
 ura fatte:=ci ik-ri
 2SG 畑=ALL 行く-IMP
 あんたが畑に行け。(質問 2)

⁵ 「子供が学校に行く」(日本語記述文法研究会編 2009=2011: 6) など

⁶ 「犬が花子に吠える」など

- (32) inu=ga hanako=ci fuit-a-N
inu=ga hanako=ci fui-a-N
犬=NOM 花子=DIR 吠える-PST-IND
犬が花子に吠えた。

2. 3. 6 奪格 (ablative)

奪格は①移動・時間・範囲・変化前の起点、②空間的な経過域を表す。①は共通語の「から」と対応し、②空間的な経過域は、共通語の「を」の用法の一部に対応する(2. 4)。

(33) は=karaで標示される to:kjo:「東京」が、「来る」という移動の起点を表す。(34) は、=karaで標示される huzu「去年」が、事態の時間的開始点を表す。(35) は=karaで標示される mici「道」が「歩く」という動作の経過領域を表す。(35) のように、動詞が空間的な位置変化を明示しない場合、共通語では「から」を用いることは出来ない(*道の真ん中から歩く)。しかし、国頭方言においてはこれが可能であり、共通語との格体系の違いだと言える。

- (33) maga=wa ici to:kjo:=kara mudut-i c-ju-i=jo:
maga=wa ici to:kjo:=kara mudu-i c-ju-i=jo:
孫=TOP いつ 東京=ABL 帰る-SEQ 来る-NPST-Q=Q
孫はいつ東京から帰ってくるの? (質問 24)

- (34) maga=nu/ga huzu=kara to:kjo:=ni uN
maga=nu/ga huzu=kara to:kjo:=ni u-N
孫=NOM 去年=ABL 東京=LOC1 いる-IND
孫は去年から東京にいる。(質問 23)

- (35) mici=nu maNnaka=kara ak-una=jo:
mici=nu maNnaka=kara ak-run-a=jo:
道=GEN 真ん中=ABL 歩く-PROH=SFP
道の真ん中を歩くなよ。(質問 13)

2. 3. 7 終局格 (terminative)

終局格=Ntani (Ntane)、=Ntabeは、場所・時間範囲の終点を表し、共通語の「まで」に対応する。2つの形式は交換可能であり、意味や機能の使い分けはないと思われる。

(36) は=Ntani (Ntane) で標示される jozi「4時」が「待つ」という行為を頼む時間的範囲の終点を表す。(37) は=Ntabeで標示される ja:「家」が「荷物を担ぐ」という行為の場所的な終点を指す。

- (36) jozi=Ntabe/Ntani eki=niti macj-u-ri=jo:
jozi=Ntane/Ntani eki=niti mat-u-ri=jo:
4時=TER2 駅=LOC2 待つ-PROG-IMP=SFP
4時まで駅で待っていてね。(質問 28)

- (37) ziro: huN nimucu ja=Ntabe hatamit-i ik-i=jo:
 ziro: huN nimucu ja=Ntabe hatami-i ik-i=jo:
 次郎 この 荷物 家=TER1 担ぐ-SEQ 行く-IMP=SFP
 次郎、この荷物を家まで担いで行けよ。(質問 30)

3 4方言の比較

調査では知名町2集落(田皆、瀬利覚)、和泊町2集落(出花、国頭)で調査を行った。4方言の格助詞の形式を一覧にしたものが表3である。

表3. 4方言における格助詞の形式一覧

	ラベル	田皆	瀬利覚	出花	国頭
主格1	NOM1	=ga	=ga	=ga	=ga
主格2	NOM2	=nu	=nu	=nu	=nu
属格1	GEN1	=ga	=ga	=ga	=ga
属格2	GEN2	=nu	=nu	=nu	=nu
与格	DAT	=ni	=ni	=ni	=ni
具格	INS	=si	=si	=si	=si
共格	COM	=tu	=tu	=tu	=tu
比較格	COMPR	=nika	=jo(:)ka	=jo(:)ka	=jo(:)ka
場所格1	LOC1	=ni	=ni	=ni	=ni
場所格2	LOC2	=niti	=niti	=niti	=niti
向格	ALL	=gaci	=ci	=ci	=ci
奪格	ABL	=kara	=kara	=kara	=kara
終局格1	TER1	=Ntane	=Ntabe	=Ntabe	=Ntabe
終局格2	TER2			=Ntani	=Ntani

本調査の範囲において、4方言の比較を通じて指摘できるのは以下の3点である。

(1) 4方言は基本的に格助詞の形式・用法を共有するが、田皆方言では2つの格助詞について異なる形式を用いる。具体的には、比較格=jo(:)ka「～より」は=nika (38)、向格=ci「～へ」は=gaci (39)という形式を用いる。

(2) 終局格(～まで)において、和泊町の2方言は=Ntani(Ntane), =Ntabeの両形式を用いるのに対し、知名町の2方言は、田皆方言が=Ntane, 瀬利覚方言は=Ntabeとそれぞれ1形式しか観察されない(40, 41)なお該当する質問項目は3つ)。

(3) 「空間的な経過域」は、和泊2方言において=karaで表される一方、知名2方言では、主に対格で表示される(42, 43)。

- (38) kinju:=ja hju:=nika hazi=nu cju:-sa att-a-N
 kinju:=ja hju:=nika hazi=nu cju:-sa a-a-N
 昨日=TOP 今日=COMPR 風=NOM 強い-ADJ ある-PST-IND
 昨日は今日より風が強かった。(質問 17: 田皆)

- (39) ura=ga fate=gaci ik-i
ura=ga fate=gaci ik-i
2SG=NOM 畑=ALL 行く-IMP
あんたが畑へ行け。(質問 2: 田皆)
- (40) ku:ko:=ci=wa unu mici ik-i
ku:ko:=ci=wa unu mici ik-i
空港=ALL=TOP この道 行く-IMP
空港へはこの道を行け。(質問 12: 瀬利覚)
- (41) ku:ko:=gaci=ja unu mici ik-i
ku:ko:=gaci=ja unu mici ik-i
空港=ALL=TOP この道 行く-IMP
空港へはこの道を行け。(質問 12: 田皆)
- (42) mici=nu maNnaka=kara ac-i=wa na-ra-n=djaa
mici=nu maNnaka=kara ak-i=wa na-ran-n=djaa
道=GEN 真ん中=ABL 歩く-SEQ=TOP なる-NEG-IND=SFP
道の真ん中を歩いてはいけないよ (質問 13: 出花)
- (43) mici=nu maNnaka ac-i=wa sim-a-n=doo
mici=nu maNnaka ak-i=wa sim-ran-n=doo
道=GEN 真ん中 (ACC) 歩く-SEQ=TOP 済む-NEG-IND=SFP
道の真ん中を歩いてはいけないよ (質問 13: 田皆)

4 沖永良部諸方言と日本共通語の比較

沖永良部島諸方言と日本共通語の格助詞の違いとして、まず 2. 1 に取り上げたように主格／属格に複数形式があり、名詞の意味内容について選択されることが挙げられる。また、形式的な側面の他に、それぞれの格助詞が担う意味範囲の違いが指摘できる。以下では、それぞれの格形式の担う意味範囲の差異について、Haspelmath (2012) の semantic map (意味地図) を参考に比較する。

4. 1 格助詞形式の対応

沖永良部諸方言と共通語における、格助詞形式の対応は表 4 の通りである。表から分かる通り、場所格、具格、向格、奪格について形式が 1 対 1 の対応をしている訳ではないことが分かる。

表 4. 沖永良部島諸方言と日本共通語の格助詞

	ラベル	沖永良部諸方言	共通語
主格 1	NOM1	=ga	が
主格 2	NOM2	=nu	

属格1	GEN1	=ga	の
属格2	GEN2	=nu	
与格	DAT	=ni	に(与格)
具格	INS	=si	で
共格	COM	=tu	と
比較格	COMPR	=jo(:)ka /nika	より
場所格1	LOC1	=ni	に(場所格)
場所格2	LOC2	=niti	で
向格	ALL	=ci/gaci	へ、に(場所格)
奪格	ABL	=kara	から、を
終局格1	TER1	=Ntabe	まで
終局格2	TER2	=Ntani	

4. 2 「で」、場所格=niti、具格=si

まず、共通語において1つの格形式が担う意味機能を、複数の形式が担う事例について述べる。共通語の格助詞「で」は、場所から手段や動作の様態まで非常に広い意味で用いられるが、沖永良部島諸方言においては、場所に関しては場所格の=niti、手段や起因などその他意味については道具格の=siが表す(図3)。

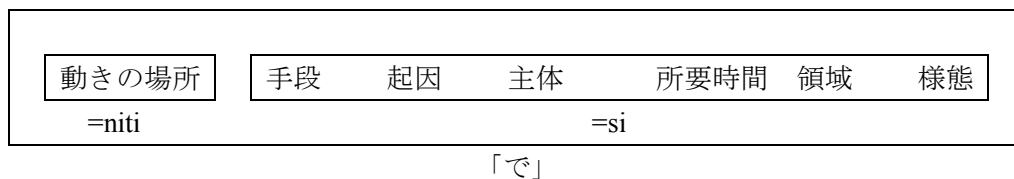


図3. 共通語「で」、沖永良部諸方言=niti, =si の意味地図

4. 3 「に」、向格=ci、具格 =si

次に、共通語の「に」(場所格)は存在の場所から動作の対象まで広い意味を担うが、沖永良部諸方言は、存在の場所、時間、変化の結果などは場所格の=ni、移動の着点や動作の対象など「方向性」を伴うものは方向格の=ciで標示される。=ciは、共通語の「へ」の機能とも重なる(図4)。

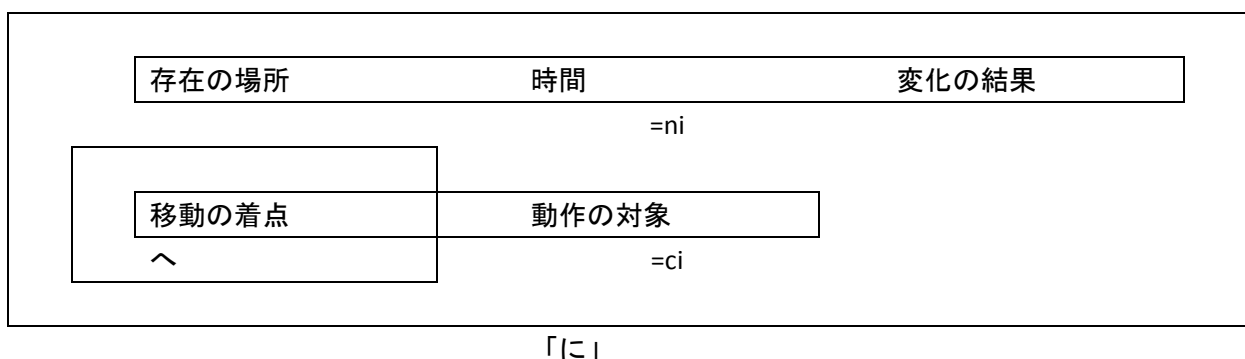


図4. 共通語「に」「へ」、沖永良部諸方言=ni, =ci の意味地図

4.4 「から」「を」、奪格=kara

最後に、共通語において複数の形式にまたがる意味用法を、1つの格形式が担う例について述べる。共通語においては、「空間的な経過域」は特に動詞が空間的な位置変化を明示しない場合「を(対格)」によって担われ、「鳥が空から飛ぶ」「道の真ん中から歩く」のように言うことは出来ない。一方で、沖永良部諸方言(少なくとも、和泊2方言)の奪格=karaは、移動・時間・範囲・変化前の起点という共通語の「から」が持つ機能に加えて、空間的な経過域といった共通語の「を」が担う機能も持ち「鳥が空から飛ぶ」「道の真ん中から歩く」のように言うことが可能である(図5)。

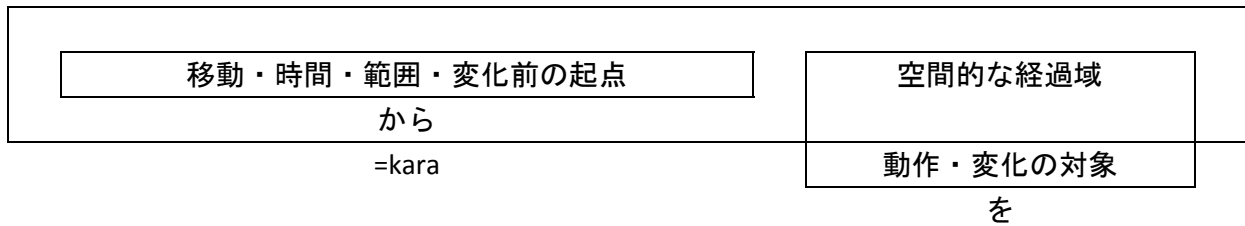


図5. 共通語「から」「を」、和泊方言=kara

5 まとめ

本稿では沖永良部島諸方言における格体系について記述を行った。文法格には主格=ga/nu、属格=ga/nu、与格=ni、意味格には具格=si、共格=tu、比較格=jo:ka/nika、場所格=ni、=niti、向格=ci/gaci、奪格=kara、終局格=tani、=tabeがある。今回調査した4方言(田皆、瀬利覚、出花、国頭)は多くの格助詞において形式を共有するが、田皆方言は比較格に=nika、向格に=gaciという形式を用いる。また、共通語の格形式と比較すると(1)主格・属格にそれぞれ二形式=ga/nuが存在し、名詞の意味内容によって選択される(2)場所格=ni、=niti、向格=ci、具格=si、奪格=karaについて、それぞれ対応する共通語の格助詞と意味範囲が異なる、といった差異が観察された。

6 略号一覧

略号	機能		略号	機能	
ABL	ablative	奪格	INT	intentional	意図
ACC	accusative	対格	LOC1	locative1	場所格 1
ADD	additional	付加	LOC2	locative2	場所格 2
ADJ	adjective	形容詞	NOM	nominative	主格
ALL	allative	向格	NPST	non-past	非過去
CAUS	causative	使役	PROG	progressive	進行
COM	comitative	共格	PROH	prohibitive	禁止
COMP	complementizer	補文標識	PST	past	過去
COMPR	comparative	比較格	Q	question	疑問
DAT	dative	与格	QUOT	quotative	引用
EMPH	emphasis	強調	RU	ru-form	ル形(接続法)
EVD	evidential	証拠	SEQ	sequential	継起法

FOC	focus	焦点	SFP	sentence final particle	終助詞
GEN	genitive	属格	SG	singular	単数
IMP	imperative	命令	TER1	terminative	終局格 1
IND	indicative	直説法	TER2	terminative 2	終局格 2
INS	instrumental	具格	TOP	topic	話題

7 参考文献

- Blake, Barry. 1994. *Case*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Dixon, R. M. W. 1979. Ergativity. *Language*, 55:59–138. Linguistic Society of America.
- Haspelmath, Martin. 2011. Terminology of case. *The Oxford Handbook of Case*, 505-517. Oxford University Press.
- Haspelmath, Martin. (2003). ‘The geometry of grammatical meaning: Semantic maps and cross-linguistic comparison’ in: Tomasello, Michael (ed.), *The new psychology of language. vol. 2.*, 211-242. Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum.
- Shilverstein, Michael. 1976. Hierarchy of features and ergativity. In Dixon, R.M.W. (ed.) *Grammatical categories in Australian languages*, 112-171. Canberra: Australian Institute of Aboriginal Studies.
- 佐々木冠 (2006) 「格」佐々木冠、渋谷勝己、工藤真由美、井上優、日高水穂編『方言の文法』1-46. 岩波書店.
- 日本記述文法研究会編 (2009=2011) 『現代日本語文法 2』くろしお出版.